



「顔の見える地域連携」を目指した多職種での情報交換と学びの会
それが、地域医療ネットワークの会です!

2025年10月4日 第50回 地域医療ネットワークの会 認知症と災害、私たちが備えるべきこと

認知症のある方々は、避難の判断や行動、環境の変化に対応が難しくなり、命の危機や深刻な混乱を招くことがあります。今回は、医療現場の視点、そして地域全体で支える視点から、「認知症と災害」を考えました。また、施設・病院での事例や課題を共有しながら、地域の一人ひとりができる備えや支援のあり方の意見交換を行いました。

今回は対面で開催し、21施設50名の参加がありました。

座長 聖マリアンナ医科大学病院 メディカルサポートセンター看護師 小田直子

発表者 聖マリアンナ医科大学病院 認知症看護認定看護師 小橋章人

聖マリアンナ医科大学病院 認知症看護認定看護師 小橋章人から講義がありました。

認知症患者の特徴として記憶障害や見当識障害などの中核症状がありますが、震災などの非日常的な環境の影響で認知症のBPSD(不穏、興奮、徘徊)が現れるようになります。また、避難所で生活すると、環境になじめずBPSDが急激に増加します。これは、近時記憶障害ゆえに地震があったことを忘れてしまい、音や環境刺激が強すぎたり急な環境変化についていけないことが影響します。



そのため、認知症の患者本人が安心する環境を作ることが大切になります。本人にとってなじみのある人を置くことやストレスになる場所を避けて休んでいただく環境作りが重要です。また、家族に任せると疲弊してしまうため、避難所等の運営スタッフと連携し認知症対応力の強化を図る必要があります。

講義の最後には石巻赤十字病院の3.11初動の記録の動画を視聴し、震災時の支援者の実際の動きを確認しました。

次に、グループワークに分かれて「①大地震発生時のつながり・備えはどうしていますか②大地震被災2-3日後、あなたはどのように対応しますか～認知症の方に起こりうる困難を想定して～」をテーマに話し合いました。

①では、それぞれの立場で備えていることや、現状で対策が必要と感じていることなどを共有しました。日ごろの訓練に加え、水や内服、電源など自分で備えて自助努力できるように準備していくことが必要であると意見が多く出ました。②では、実際の利用者さんを例に挙げ検討するグループもありました。避難所にとどまることができない認知症患者を、家族だけではなく地域の看護師などと協力体制をつくり、地域で連携をとって支える必要があると話し合いで意見が出ました。



アンケート結果では、実際の災害時の連携方法などを考える良いきっかけになったと感じた方がたくさんいらっしゃいました。第50回地域ネットワークの会では、認知症と災害のテーマで講義を聞きグループワークをしたことで、今後起こりうる災害に向けて、それぞれがどのように対策を考えるか、どのような連携が必要かを考えることができた会になりました。